明治大学図書館の毛利家文庫旧蔵書について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学古代学研究所 公開日: 2024-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野,淳司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000511

明治大学図書館の毛利家文庫旧蔵書について

牧野 淳司

明治大学図書館には毛利家文庫旧蔵書が所蔵されている。しかし、目録は作成されておらず、全体像が不明である。そこで、二〇二三年度から毛利家文庫旧蔵本の調査を行い、目録を作成する作業を開始した。科学研究費補助金を得て五年間で進める計画である。本稿では、明治大学図書館が所蔵する毛利家文庫旧蔵書の現状と、調査・作業の進展状況について報告する。

一　毛利家文庫について

毛利家文庫（公爵毛利家文庫）は、明治から昭和戦前期に、旧萩藩主毛利家が東京芝高輪の邸宅で行った修史事業の過程で形成された文書・蔵書群である。第一類御重書、第二類旧記、第三類典籍、第四類絵図、第五類刊本の五部から成っていた。明治時代以後に購入・寄贈・収集されたものも含まれるが、大半は旧藩時代あるいはそれ以前から毛利家に伝わった御重書・古文書・旧記類で、数万点に及んだ。[1]

毛利家文庫の形成過程については山﨑一郎氏の一連の研究に詳しい。[2] 詳細は氏の論を参照いただくとして、ここでは簡単に整理する。明治四年（一八七一）の廃藩置県以降、旧藩記録は県と毛利家の間で分割された。毛利家は明治十六年（一八八三）、文書記録類を東京に移送し、同地で家史編纂事業を開始した。県庁分は旧記庫で管理されたが、明治二十七年（一八九四）から昭和二年（一九二七）にかけて計六回にわたり、行政的価値が低下した文書記録三、二〇〇点余が毛利家に譲渡・貸与された。その後、昭和五年（一九三〇）、毛利家に移管されずに残されていた大量の旧藩記録が県立山口図書館へ移管された。さらに昭和三十四年（一九五九）には山口県文書館が設立され、以後そこで管理されることになった。一方、東京へ移送された分は、家史編纂事業の過程で新たな史資料が加わって量的に拡大した。山口県から毛利家へ譲渡されたもののほか、旧家臣から寄贈されたもの、毛利家で購入したもの、修史事業のために筆写収集したものなどがあった。

東京での家史編纂事業は担当部署を変更しながらも、昭和二十二年（一九四七）まで継続した。その後、昭和二十五年（一九五〇）、毛利家が高輪邸を手放す際、付属する鉄筋コンクリート三階の書庫内に所蔵されていた文書・図書類も搬出されることになった。毛利家伝来の毛利家文書や重書類は防府の多々良邸へ移された。旧記や絵図類は山口県に寄託された。そして、典籍類は明治大学へ移

譲され、刊本類は一般希望者に分譲された。その他の二次的資料は高崎経済大学へ移った[3]。明治大学に所蔵される毛利家文庫旧蔵書は、高輪邸の書庫にあった蔵書の一部ということになる。

二　渡辺世祐の縁故

毛利家文庫の典籍類が明治大学に譲られたのは、明治大学で教鞭をとっていた渡辺世祐博士の縁故によるものであった。三坂圭治氏の文章に「典籍は三卿伝編纂所の所長であった渡辺世祐博士の縁故で明治大学へ譲り」とある[4]。渡辺世祐は著名な中世史研究者であるが[5]、明治大学にとっても重要な人物である。昭和七年（一九三二）、東京帝国大学史料編纂官在任（退任は同十一年）のまま、明治大学文科専門部の創立に尽力し、発足以後は史学科長（のち地歴科長）、さらに昭和二十四年（一九四九）、新制文学部発足後は文学部長となった[6]。昭和三十二年（一九五七）に八十三歳で死去した。

毛利家文庫のことに触れているわけではないが、『明治大学文学部五十年史』に渡辺世祐の人柄を表す記事があるので紹介したい。日本史学の教授であった木村礎の文章である。

「私は戦争中の地歴科学生だったから、教壇における渡辺のことはよく知っていたが、親しく接するようになったのは、昭和二十四年春新制文学部の助手になってからである。最初の内は研究室が大部屋だったので、私は渡辺の威圧をあまり感じなかったが、間もなく小部屋の研究室が本館の三、四階にでき、渡辺と私はその一つに二人だけで暮すようになった。二人の間にはちょうど五十歳の差があり、渡辺にとっての私はあまりにも若僧であり、私にとっての渡辺はあまりにも老人であった。渡辺はきわめて厳格な人で、古武士の風格があった（長州藩下級武士の子。彼の仲人は高杉晋作の兄だという話を聞いた憶えがあるが定かでない）。私は彼に時々叱られた。お前のような奴はクビだといわれたことが少なくとも二回はある。私は彼を陰で「閣下」と呼んだ。」

「渡辺は最長老であった。したがって、中村孝也（日本史、没）や後藤守一（考古学、没）のような、私から見れば長老級の教授も、渡辺の前では若者扱いであった。渡辺がこうした人々に「君ら若い者は……」と言っているのを私は側でしばしば聞いている。木造校舎の教員室で火鉢を囲んで雑談しているところへ渡辺が入ってくると、人々はいつの間にやらひそひそと散っていく。私ばかりは逃げるわけにも行かず閉口したものである。そうした中で宗京奨三（日本史、定年退職）だけは不思議なことに、さしで平気でしゃべっていた。渡辺も宗京のいうことはよく聞いていたようである。」

「渡辺は長州出身で、井上馨に可愛がられたという。その関係からか、井上育英会の重要な役職についていたことがあり、したがって長州系の政治家や実業人をよく知っていた。晩年の彼は両国の同愛病院で闘病していたが、そのある日、彼を見舞った私が病室を出ると、病室に向って廊下を歩いてくる見憶えのある男とすれ違った。当時外務大臣の岸信介（長州出身）であった。」

「彼の学問には一種の凄味があり、私は今でもその威圧から逃れられない。無邪気な自慢話が好きだったが、性格は剛毅で男っぽくカラッとしており、死後二七年たった今でも、私には彼についての実在感がある。彼の文学部葬が済んで間もなく研究室（現在の建物、ただし四階）に入ると、彼の机はそのままにあり、壁面には吉田松陰（だったと思う）の書が変らずかかっていた。私はそれをじっと眺め、やがて、それを壁から外してくるくるっと巻き、棚にしまった。」

「彼は八十歳をこえても現職にあった（定年制度なし。大学顧問をも兼任）。しかしさすがにそのころには衰え、多く病床にあった。彼の最後の論文集『国史論叢』が編まれたのはそのころである。彼はそこに収むべき論文を指示し、序文を中途まで書いたところで入院した。私は本の完成を彼に見てもらいたいと思

い懸命に校正した。私にせかされた出版社は最初の一冊を持ってきた。それには背文字がまだ入っていなかった。私はそれを持って、両国の同愛病院にかけつけた。彼は本を見るなり〝もっとしっかりしたものを持ってこんかい〟と私を叱りつけた。凄い人であった。私には今でも渡辺への畏怖がある。」

渡辺世祐と、毛利家本が明治大学へ譲られた頃の状況について、丁寧に調べる必要があるが、今回は明治大学で同僚であった人物の証言を紹介した。大量の毛利家文庫旧蔵書が明治大学図書館に入り、その後、整理されないままになったことを合わせ考えると、興味深いところもあるからである。

三　明治大学図書館毛利家文庫旧蔵書の現状

戦後、山口県に寄託された旧記や絵図類は県庁分から引き継いだものと合わせて、現在は山口県文書館で保管・管理されている。大量の文書類について、『山口県文書館史料目録　毛利家文庫目録』（第一分冊～第五分冊）で確認できる上、近年は山口県文書館のホームページに文書リストが公開されており、検索も容易である。

防府の多々良邸へ戻った分については、昭和五十四年から五十七年にかけて調査が行われ、その報告書が山口県教育委員会文化課文化財保護係編『毛利家歴史資料目録』として二冊（古文書・典籍編と美術工芸編）刊行された。多々良邸の毛利本は現在、毛利博物館で管理されている。

それらに対し、明治大学図書館に入った分は未整理で、目録も作成されていない。[7] しかも、まとまった文庫を形成しておらず、いくつかの書庫（和装本コーナー、第三書庫、貴重書庫、一般書架）に分散して配架されている。[8] 書誌データ上に「毛利家文庫旧蔵書」と入力済みのものもあるが、未入力のものもあるので、データから毛利家文庫旧蔵本のすべてを検索して把握することもできない。

このような状況なので、まずは毛利家文庫旧蔵書を全点確認する作業から始めている。現物を一点一点確認し、毛利家文庫旧蔵書を特定しなければならない。毛利家文庫旧蔵書の大多数には表紙に蔵書票（ラベル）（図版1）が貼り付けてあるので、判別は容易である。蔵書票のないものも、印記（図版2）から毛利家文庫旧蔵と分かるものは拾い出している。なお、毛利家文庫旧蔵書に捺された蔵書印も、文庫形成の手掛かりになる可能性があるので、なるべく拾うようにしていく予定である。まだ少数しか集めていないが、現在までに撮影した印記を最後に掲示した（図版3）。二〇二三年六月から開始した作業は、二〇二四年一月現在も継続中であるが、なるべく早く完了させたい。

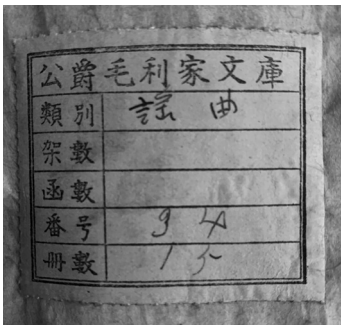
全点を把握した後は目録を作成するが、その際には、かつての毛利家文庫の分類体系を尊重する予定である。明治大学図書館に入った毛利家文庫本と最も関係が深いと予想されるのが、山口県文書館蔵『毛利家文庫書籍目録』五冊（両公伝史料／3170～3174）である。第一冊の表紙に縦長の紙片を貼付し、鉛筆書で「「書籍」大部分明大図書館へ送分」と書いてある。この目録がどのようなものか精査する必要があるが、たとえば第一冊は「一　宮廷　二　幕府　三　修養　四　神典　五　仏典　六　陰陽　七　文藻　八　論策　九　遺稿　十　筆記　十一　紀行　十二　随筆」の十二類について、番号・書名・冊数を記載している。この類別と番号と冊数が、毛利家旧蔵書の表紙に貼られたラベルに記載の類別・番号・冊数と対応していると思われる。照合作業により、目録のうち明治大学図書館所蔵分がどこまでの範囲であるか確認できる。

毛利家の蔵書は大名家が築いた知的体系の中でも重要なものの一つであろう。もちろん、明治大学図書館が所蔵する毛利家文庫旧蔵本は、巨大であった毛利家文庫の一部でしかない。しかし、山口県文書館と毛利博物館のものと合わせることで、毛利家のアーカイブズのかなりの部分が復原可能かもしれない。

そのためにも明治大学図書館が所蔵する毛利家文庫旧蔵本の調査と整理は急務である。

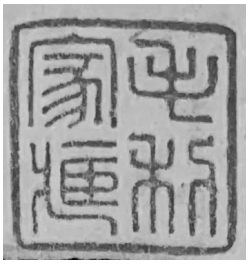
本稿は調査を開始するに当たって、明治大学図書館所蔵の毛利家文庫の現状を述べたもので、本格的研究はこれからである。ここで書いた事柄についても、調べ足りないところや間違った点があると思う。お気づきの点についてご教示とご批正を賜ることができれば幸いである。

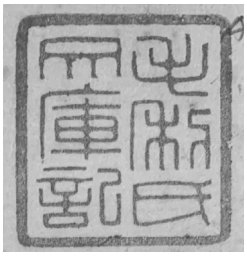
図版1　蔵書票（ラベル）



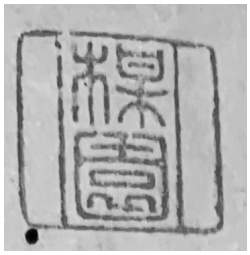
図版2　毛利家文庫の蔵書印

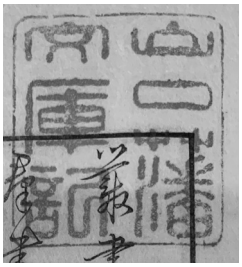
「毛利什書」


「毛利家蔵」

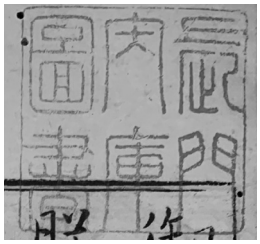

「毛利氏文庫記」

図版3　その他の蔵書印

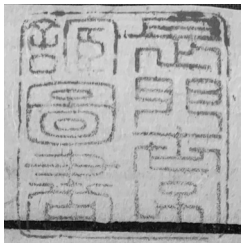

「梅園」


「山口藩文庫記」

「新宮書籍」


「長門内庫図書」

「近江上田家蔵」


「長門世子館図書」

注

（1）三坂圭治「毛利家文庫と毛利家文書」（山口県教育委員会文化課文化財保護係編『山口県歴史資料調査報告書　毛利家歴史資料目録（古文書・典籍編）』、一九八三年）。

（2）山﨑一郎「明治～昭和戦前期、山口県庁における旧藩記録の保存と利用―毛利家文庫と県庁伝来旧藩記録―」（『山口県史研究』一〇、二〇〇二年）、同「萩藩における文書管理と記録作成」（国文学研究資料館編『藩政アーカイブズの研究―近世における文書管理と保存―』岩田書院、二〇〇八年）、同「毛利家文庫の形成過程と文書群構造」（『山口県文書館研究紀要』三七、二〇一〇年）、同「近代における毛利家文庫の形成と萩藩庁文書」『史学研究』（広島史学研究会）二八〇、二〇一三年）など。

（3）注（1）三坂圭治の他、小山良昌「公爵毛利家時代の写真群」（『山口県地方史研究』一〇二、二〇〇九年）を参照。なお、毛利家文庫について、広田暢久「毛利家文庫に対する一考察」（岩倉規夫・大久保利謙編『近代文書学への展開』柏書房、一九八二年）も参照。

（4）注（1）に同じ。三坂氏は、昭和五年から臨時職員として両公伝の編纂に従事し、昭和十年から正規の家従職を兼ねて毛利家文庫の管理を一任され、昭和二十年の終戦までその任にあった。熊本守雄「典籍（国書）―文学関係資料を中心に―」（山口県教育委員会文化課文化財保護係編『山口県歴史資料調査報告書　毛利家歴史資料目録（古文書・典籍編）』、一九八三年）にも「典籍の多くも、戦後、明治大学に移譲されており」とあるが、小野田セメントの設立者笠井順八へ下されたものなど毛利家から出たものもあったとある。

（5）学問は実証主義で古文書中心であった。主著は『関東中心足利時代之研究』（一九二六年）。

（6）昭和二十四年、新制文学部発足に当たって、予科長だった小林秀穂の学部長就任がきまっていたが、その急逝により学部長を代行し、そのまま学部長となった。形式的には二代目だが実質的には初代学部長である。昭和二十九年まで、その任にあった。渡辺世祐については、以下の記述も含めて、明治大学文学部50年史編纂委員会編『明治大学文学部五十年史』（明治大学文学部、一九八四年）を参照した。

（7）『明治大学図書館所蔵　毛利家旧蔵本仮目録』（一九九二年）があるが、これは一九七〇年代に作成したカード目録を並べてコピーし、製本したものである。一九七〇年代のカード目録は、蔵書から毛利本のうち貴重なものを探し出してカードをもう一枚作成し、そこに「毛利家文庫旧蔵本」と注記して、まとめたものである。しかし、すべての毛利家本を抜き出していないので、この目録では毛利家文庫旧蔵本の一部しか知ることができない。

（8）明治大学デジタルアーカイブが、二〇二三年十月に公開されたが、ここでも「毛利家文庫旧蔵本」はまとまった扱いとなっていない。

［附記］本稿はJSPS科研費基盤研究（B）「中近世毛利家における知的体系の復原的研究―明治大学図書館所蔵毛利家旧蔵書を起点に」（課題番号／領域番号23H00605）の助成を受けた成果である。なお、本号には明治大学図書館が所蔵する毛利家文庫旧蔵書のうち、『出葉口伝抄』と『飛鳥井雅親卿歌書』の解題と翻刻（石澤一志氏執筆）を掲載している。合わせてご覧いただければ幸いである。